

氏 名 德永 誓子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1569 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「融通念仏縁起」の研究  
—物語絵にみる日本中世の信仰世界—

論文審査委員 主 査 教授 荒木 浩  
教授 小松 和彦  
准教授 磯前 順一  
教授 徳田 和夫 学習院女子大学  
教授 林 淳 愛知学院大学

## 論文内容の要旨

「融通念仏縁起」は融通念仏の創唱者といわれる平安時代の念仏僧良忍の伝記と彼の勧めにより念仏に交衆した人びとの逸話をおさめた絵巻である。正和3年(1314)に制作された縁起原本は確認されていないが、14世紀後半から15世紀にかけて作られたものを中心に、田代尚光氏により30本弱の写本の現存が確認されている。本稿では、現存写本のうち、田代氏の分類でいう古様式形態本9点および新様式形態本2点、計11点の比較検討を通じて、写本転写過程の見直しと縁起原本制作背景の究明を試みた。

具体的な考察は以下のように進めた。まず、本稿が正和原本に最も近いと推察したアメリカ合衆国フリア美術館蔵本について、他写本と相違が大きい二つの段、第15段牛飼童妻難産段と第17段正嘉疫癘段を取りあげ、その内容を検討した。その際、「絵画史料論」を提唱した黒田日出男氏にならい、絵画に描かれた事物に対し詳細な分析を加えた。その結果、該当段のいずれについても、フリア本には詞書を的確に踏まえ、物語世界を重層的に深める図様が描かれていることを指摘した(第一章・第二章)。

続いて、前記の二段について対象諸写本の図様を比較検討し、両段ともに、現存写本について次のような転写過程を想定するのが最も適切であるとの結論を得た(第三章)。

フリア本——知恩院本——義尚本

——根津美術館本——大念仏寺(A)本——聞名寺本

——シカゴ・クリーブランド本

——家高模本——明德版本他

なお、例外的に上記の転写過程が当てはまらない第18段光明遍照段を対象に、別途、考察を行った。そして、シカゴ・クリーブランド本の位置づけが異なる点を除けば、当該段についても上記仮説を概ね敷衍しうることで、当該段のフリア本図には鎌倉幕府將軍庇護下での融通念仏勧進が表現されているとも推測できること、以上の2点を明らかにすることができた(第四章)。

ついで、これまでの考察結果に基づき、正和原本の成立背景を追求した。まず、縁起に含まれる逸話のうち正嘉疫癘段のみが時代・舞台ともに他と異なり、そこに特別な意味が読みとられること、また、14世紀後半から15世紀前半にかけて写本の大量制作を進めた勧進僧良鎮が浄土宗鎮西派に近い人脈に属したこと、この二点を指摘した。それらの点を踏まえ、縁起原本は正嘉疫癘段の舞台与野郷周辺、すなわち関東地方において浄土宗鎮西派周辺の念仏僧によって作られた可能性があると論じた。また、融通念仏をひろめる対象としてその地の土豪・有力農民を想定したからこそ、フリア本に残存する独特の図様が選ばれたと考えた(第五章)。

以上の考察を通じて、本稿は「融通念仏縁起」に関し従来とは全く異なる説を呈するにいたった。その要点は以下のようにまとめられる。

- ①現存写本のうち最も正和原本の形態を留めているのは、先行研究が「原本に忠実」な最古本と評価してきたシカゴ・クリーブランド本ではなくフリア本である。シカゴ・クリーブランド本は、古様式形態本の中ではむしろ比較的遅い時期に制作されたと推測できる。
- ②原本が成立した14世紀初頭から15世紀の間に「融通念仏縁起」制作の勧進を担った人びとは、浄土宗鎮西派に近い存在であり、熱さないながらも一宗派を形成しようという

志向を有していた。ただし、彼らの動きは16世紀には断絶し後代に繋がることはなかった。

本稿は、1980年代以後に確立した学際的な物語絵研究の視角に学び、従来の仏教史、美術史、日本中世史、民俗の各学問領域における関心の重なりとずれを意識し、それらが見落としてきたものをすくいとることを目指した。その視座によって新たな「融通念仏縁起」像を提示し、これまで看過されていた日本中世信仰世界の一端を明らかにしえたものと考ええる。

## 博士論文の審査結果の要旨

本論文は、『融通念仏縁起』という絵巻の写本を中心的な対象として、その物語絵に描かれた日本の中世信仰の姿を考究しようとするものである。『融通念仏縁起』には、融通念仏の創唱者とされる平安後期の念仏僧良忍（1073～1132）の伝記と、彼の勧めにより念仏に交衆した人々の逸話が収め描かれている。絵巻は正和3年（1314）に初めて制作されたと推定される。この原本（正和原本と呼ぶ）はいまだ発見されていないが、これまでの研究では、約30本にも及ぶ写本が現存することが確認されている。『融通念仏縁起』については、近時学会発表が相次ぎ、注目すべき研究史的価値をもつ絵巻の一つとされている。

本論文のもっとも重要な主張の一つは、その伝本系統論の根本的な見直しである。従来の説では、シカゴ美術館とクリーブランド美術館に分蔵されている写本（シカゴ・クリーブランド本とも呼ぶ）がもっとも原本に近いものとされてきたが、本論文は、『融通念仏縁起』の諸伝本（版本も含む）を俯瞰した上で、九点の重要写本を分析の対象とする。絵巻に描かれた絵と詞書きの精細な読解から、特にその図様に焦点をあてて分析を進めている。その研究方法は、近年めざましい進展を遂げた絵画史料論を、学説史の検証を踏まえつつ援用し、同時に、美術史学的研究の最新成果や、仏教史学、宗教研究、民俗学など学際的な視点も十分に吸収して、先学の研究を批判的に精査している。その結果、現存伝本のうち、最も正和原本に近い伝本はフリア美術館蔵のものであることを明らかにし、これを基礎に、諸伝本の系統を再構築している。

第一章では、まずフリア本に描かれた「牛飼童妻難産」段を取り上げ、その建物の不自然な描写が何らかの誤写に由来することを指摘し、その分析を通じて、別場面の良忍が描かれていることを発見するなど、フリア本の読解基盤を明確に定位している。さらに「正嘉疫癘」段を分析するが、その解釈は、きわめてすぐれた発見を含む。本論は、疫病から逃れようと別時念仏を行う名主の道場の場面、名主の見た夢の世界、そして他所にいる娘が亡くなるどころという三段に分かれる図様の全体を再検討する中で、特に中心となる、夢に描かれた行列する疫神の描写を精細に分析し、中心に位置する騎牛する貴人を牛頭天王であると読み解いて、この行列が祇園社の主神牛頭天王とその眷属だと位置づける。そして、別時念仏の道場の番帳（別時念仏の当番表）に書き入れた名前に疫神が判形を書き加えた者だけが救われ、別所にいて念仏に参加できなかったため、親の名主の懇願にも拘わらず、疫神が判形を書いてくれなかった娘のみが命を落とす、というストーリーから、この神が疫神でもあり、またその疫神を退ける神でもある、という二面性を指摘する。その上で、妖怪研究の研究成果なども取り入れながら、『牛頭天王縁起』などとの対比から、その図様を、立体的に読み解いていく。こうしてフリア本の特質と優越性を読み解いた上で、第二章と三章では、その両段に関する諸本との対比が論じられ、本論文が提示する新しい諸本系統図が確認されていくのである。

ただし、そうした系統図の中で例外的に処理しなければならないのが、最終段に位置する「光明遍照」段である。「光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨」という『観無量寿経』の四句の偈文のみを詞書とし、光明を発する阿弥陀如来を中心に描くこの特異な章段について、第四章では、対象諸本の比定関係を丁寧に分析し、諸本がそれぞれ、配置や比定は異にするものの、いずれも十人の人物が阿弥陀如来を囲んで、その光明によって救済

される構図を示すのに対し、クリーブランド本のみは、十六人もの人物を配し、その中に、光を受けなかったり、光に背を向けている人物像を取り混ぜていることに着目する。本論文は、クリーブランド本の本図が、専修念仏の思想を反映した「攝取不捨曼荼羅」の唯一の遺例であることを確認した上で、ここに描かれた思想が、『融通念仏縁起』総体に描かれた思想とは乖離することから、この図については、この本もしくはその先行写本を描いた絵師が、手元にあった図様を転用したものであると推定する。よって『融通念仏縁起』本来の図様としては、やはりフリア本他の伝本によって理解すべきであるとして、伝本系統図の異例を解決している。とりわけ、阿弥陀の頭上に位置する僧綱が持っている巻物様のものも、フリア本では、巻物を開いてこちら側に見せているので、その文字が見え、これが融通念仏結縁者の名前を書き入れる名帳であると読み解ける、という。この解釈によって、この段が『融通念仏縁起』の最終段に位置する意義が傍証される点も重要である。

第五章では、このようにして作られた『融通念仏縁起』の成立の背景を、「正嘉疫癘」段に描かれた世界に探り、それが武蔵国与野郷を舞台とすることから、この絵巻が関東地方で成立した可能性を論じる。そしてその可能性をめぐって、十四～五世紀にかけて大量の写本制作を行った勸進僧良鎮とその融通念仏の系譜の思想的展開、正和原本の享受層についても分析を及ぼしている。

本論文によって、『融通念仏縁起』の多様な意味世界の解明が、一つ一つの図様の精緻な分析によって成し遂げられている。歴史的文献学的手法も的確である。本論文で考察された祇園神や疫神の分析が、申請者が有する修験道や山岳信仰についての研究蓄積を活かして、より国際的な場に応用されれば、比較宗教史的にも、今後、より大きな成果をもたらすことが期待される。

だが本論文には課題も残されている。フリア本が正和原本転写の起点としての姿を伝える、ということについて論述は明確であるが、フリア本と系統の近い知恩院本他の伝本群との比較を、もう少し多くの場面も含めて有機的に進め、伝本それぞれについての書誌的分析にも踏み込んで、論述を進める必要もあるだろう。また、正和原本が関東で制作されたとする主張はきわめて興味深いものであるが、それがなぜ与野という地におけるものなのか、ということも含めた、総合的な分析も望まれる。

上記のように、一部、研究の深化が望まれる部分は残すものの、その内容はすぐれた新見を多く含む堅実な論文であり、審査員は全員一致で、本論文を本専攻の課程博士に相応しいものと認定した。